# 見知らぬ橋

船山馨

講談社

見知らぬ橋

昭和四十六年九月二十八日　第一刷発行
昭和四十六年十一月二十日　第三刷発行

著者＝船山　馨

発行者＝野間省一

発行所＝株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話＝東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振替＝東京三九三〇

印刷所＝信毎書籍印刷株式会社

製本所＝加藤製本株式会社

定価＝七八〇円　落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© 船山　馨　昭和四十六年　Printed in Japan

0093-125318-2253 (0)　(文1)

# 見知らぬ橋

装幀＝原弘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 一

機内からひと足タラップを降りかけると、いきなり、細かい硬質の雪片が、肌を刺す風にのって、横なぐりに頬を叩いた。

鉛色の空の下に平野が拡がり、眼の前に空港のビルだけが、凍えたように孤立していたが、それも風まじりの降雪に遮切られて、古いフイルムのなかの眺めのように不鮮明であった。

手すりに摑まっていながら、恒秋は風に重心をとられそうになって、タラップの途中でよろめいた。

「気をつけて、お父さん……」

名緒子が背後から、彼の瘦せた軀を支えた。

「さすがに北の果やな……」

足もとに視線を落したまま呟きながら、恒秋は慎重にひと足ずつ立ちどまるような緩慢さで、薄氷の張った飛行場へ降り立った。二人の後につづいている客たちの焦ら立ちを、名緒子は背中に感じていた。

大阪から羽田で便を乗り継いで、仙台の上空あたりまでは好天に恵まれて、飛行機が初めての恒秋も、案じたほどのことはなく、小窓からの風景に見とれたりしていたが、それから気流が悪くなった。津軽海峡を越えるころから、彼は気分が悪くなって、血の気の引いた顔に膏汗を浮かせて口をきかなくなった。それが尾を引いていて、まだ足もとが定まらないようであった。

降りたのは先頭に近かったのに、薄氷に足をとられないように恒秋をかばいながら、用心して歩いているので、空港ビルの入口へ辿り着いたときには、二人だけがほかの乗客から、かなり遅れてしまっていた。

「京都の魚住さんでしょうか」

扉を入ったすぐのところに、ホテル・キャッスルと染め抜いた、赤い小旗を拡げて立っていた蝶ネクタイの青年が、慇懃に声をかけてきた。

名緒子がそうだと答えると、青年は彼女の手からスーツ・ケースを受取って、

「社長の云いつけで、お迎えにあがりました。社長もホテルのほうでお待ち申しております」

と、先に立って待合室の人混みを縫いながら、空港の玄関へ出ていった。そこに車が待っていた。

「こんな吹き降りのなかを、お手数をかけまして、えろう済まんことで……」

走り出した車のなかで、恒秋はあらためて助手席の青年

の背中に頭を下げた。
「けど、出来ましたら、すぐ日向さんのお邸のほうへ伺いたいのですが……。早よう面を拝見させていただきとう思いますのどすけど……」
「それもホテルのほうに用意してあるそうです」
青年はバック・ミラーのなかで、眼に職業的な微笑を含んだ。手のすいたフロント係かなにかだろうと、名緒子は思った。
「いいときにお着きになりました。この後の便は欠航だそうです」
クリーナーがフロント・ガラスに掃く扇型の視界に眼をあてたままで、青年が云った。
「北海道はお初めてですか」
「私は高校の修学旅行で、札幌まで来たことがいち度だけありますけれど、もう十年近くも前のことですし、父は今度が初めてです」
と、名緒子が恒秋にかわって答えた。
六十二になる恒秋は、この数年めっきり体が弱って来ていた。胃がわるいのは若いころからであったが、近年になって、とくに足腰の衰えが眼立つようになったのは、なんといっても、いち日じゅう坐りきりで能面を彫る仕事を、四十年の余もつづけて来たせいであった。今度キャッスル・ホテルの日向社長から招かれたときも、名緒子は恒秋の健康を気遣う思いが先に立った。日向が往復の飛行機の手配をしてくれるとはいっても、やはり京都から札幌までは、恒秋には遠すぎた。そのうえ、二月半ばの酷寒期でもある。お断わりしたら、と名緒子は云ったが、彼はきかなかった。
日向修三は道内の眼星しい観光地を網羅するキャッスル・チェーンのホテルの社長であるばかりでなく、全国でも屈指の炭鉱経営者であり、汽船会社やバス会社も持っていて、中央の財界でも名前が通っていたが、能の愛好者で、能面の蒐集家としても著名であった。
その彼が恒秋を名指しで、秘蔵の面の写しを打ってほしいと註文して来たのに、恒秋は抑えがたい魅力を感じたようであった。しかも、写すのは女面のなかの〈孫次郎〉だという。日向の秘蔵している〈孫次郎〉は、専門家のあいだで、いわゆる中作と呼ばれる、桃山期の逸品として定評があった。
能面打なら、誰しも心をそそられずにはいられない仕事であったが、まして恒秋は女面を得意としている。名緒子がとめたくらいで、いったん火のついた彼の制作意欲が薄れるはずはなかった。そのことは、子供のころから恒秋のきびしい指導で、彼女自身もかなり水準の高い面を打つようになっているだけに、名緒子には一層よく理解できた。
結局、日向の許しを得て、彼女が介添役で蹤いて来るし

かなかったのだが、それにしても、千歳に着くなりこの荒天では、やはり、恒秋には楽な旅ではなかったと、一抹の後悔に似た思いが、名緒子の心をかすめていた。
車は緩やかなうねりをもった、広い原野のなかの道を走りつづけた。何度か道の両側に、小さな町なみがひらけ、そしてそれを走りぬけるたびに、また、道は新たな原野と丘陵のうねりを辿った。
だが、それも名緒子の坐っている側からは、なにも見えなかった。吹きつける雪に覆われて、窓硝子が白い闇になっていた。札幌の街へ入るまで、一時間余りかかった。
ホテルへ着くと、社長室へ案内される前に、恒秋はひとまず用意されてあった部屋へ入って袴をつけ直し、名緒子にも化粧を直させた。口下手なうえに無愛想なので、どうかすると誤解を受けるようなこともあったが、その実、彼は融通のきかない律儀な性格でもあった。
社長室には半白の頭髪を短かめに整えた、肩幅の広いがっしりした軀つきの老紳士と、三十を一つ二つ越したかと思われる撫で肩の、ほっそりした青年がいた。眼鏡の奥の、細い一重の眼にいくぶん女性的に感じられるほど柔和な光があった。
「やあ、遠路のところを御苦労でした。日向です。あいにくの天気で、お疲れでしたろう」
老紳士のほうが広い事務机から立って来て、気軽に手をさしのべると、二人をゆったりした革張りのソファに迎え入れた。そうして、恒秋と名緒子の挨拶を受けてから、青年のほうに眼をやって、
「伜の隆吉です」
と云った。
「よくいらっしゃいました」
青年は口もとに静かな微笑を泛べた。
「お嬢さんも面を打たれるそうですな」
珈琲を運んできたメイドが退ると、日向は興味ありげに名緒子を見つめるようにした。名緒子は当惑して、恥らいのにじんだ視線を伏せた。
「真似ごとだけはいたしますけれど、打つなんて、とても……」
「半人前の未熟者です」
ニベもない云い方を、恒秋はした。
「素人がたに手ほどきをするくらいが関の山で、玄人としてはとても通用せえしまへん」
「それにしても御婦人が、しかもお若いのに面をお打ちになるとは珍らしい。素人衆に教えたりもなさるのですか」
「塾のようなことをやっています。近頃は装飾品として、いい加減な面の需要もあるようで、趣味と実益をかねて、習いたいという物好きなお人もありますよってにな……」
恒秋の声には、触れたくないことを口にしている苦い不

機嫌が覗いていた。
「そんなことより、早速ですが御秘蔵の孫次郎を拝見させていただけしまへんやろか」
「どうぞ、どうぞ。そのためにお出ねがったのですからな」
日向は愛想よく云って、隆吉に顎をしゃくった。
「ほんとうはお手元にお預けするといいんだが、そうもいかんので、そのかわり一週間でも十日でも、得心のゆくまで御覧になっていただきましょう」
隆吉が事務机の上から運んできた桐箱を受取って、卓子のうえに置きながら云う日向に、恒秋は無言で頷いた。
能面の制作は、昔からすべて本面の模刻である。様式も精神も、精密に本面のそれを踏襲し切らなければならない。しかし、能楽五流の家元に秘蔵されている本面でも愛好家の所蔵品でも、借出して手元に置きながら写すということは、まず望めないことであった。
日向はホテルに滞在するあいだは、面を恒秋の手もとに置いていいという。納得のいくまで面と起居をともにできるだけでも、滅多にはない幸運と云わなければならなかった。
恒秋は桐箱の打紐を解き、蓋をとって、年代物の袋に包まれて納められている面に向って一礼してから、面を袋からとり出した。
傍らから名緒子も眼を吸われた。それは想像していた以上の逸品であった。
〈孫次郎〉の本面には有名な插話がある。
孫次郎というのは、本来は室町期の金剛流中興の祖と云われる金剛氏正の子、孫次郎久次のことだが、面は彼の妻の面影を伝えたものだと云われている。彼は夭逝した美貌の愛妻を忘れることができず、その生前の風貌を面に写して、生涯愛用したという。
永禄七年（一五六四年）には、孫次郎久次も妻のあとを慕うように、二十七歳の若さで病没したが、〈おもかげ〉と名づけられたその本面は、現在もなお、能面蒐集家として著名な、東京の三井八郎右衛門邸の奥深くに秘蔵されている。
名緒子もいち度だけではあったが、恒秋とともに、京都の美術館に出陳中の本面を観たことがあって、深い静謐のなかに凝縮しているその艶麗さは、いまも心に焼きつけられていた。だが、眼の前の〈孫次郎〉も、ほとんど本面と遜色がなかった。彫りも、肉のせも、毛描きも、どこに一点の隙もなかった。
恒秋は面の裏を返した。古色の深い木肌に、かすかに銘の澤のあとが消え残っていたが、彼の視力では判読できなかった。彼は面の耳を両手で捧げるようにして、名緒子の前にさしのべた。

「天正二……でしょうか。でも、七とも読めるょうどすな」
あとは彼女にも読みとれなかった。というより、字が木肌の暗い古色のなかに消えてしまっていた。
恒秋は頷いただけで、また面の表を返して憑かれたように見入った。
天正七年としても、孫次郎の死から十五年目である。本面の成立から、いくらの歳月も経っていない時期の作だということになる。また作風、古色、肉づけの剝脱した耳の部分に、覗いている漆地などからも、それは裏づけられていた。素材が檜でなく、桐なのも珍らしかった。
「いかがです」
いつまでも面を凝視したままの恒秋に、いくらかしびれを切らしたように、日向が声をかけた。こういう場合の蒐集家にありがちな、無邪気な得意を包みきれない声の色であった。
恒秋は短かい溜息を洩らした。
「これほどの孫次郎を見せていただけたのは、本面以来どす」
「期日も費用も、いくらかかっても結構です。ひとつ快心のものを打っていただきましょう」
「へえ、面打の冥利どす」
と、恒秋はなおも〈孫次郎〉を手から離さなかった。
名緒子は恒秋が面を置くのを待って、さまざまな角度から〈孫次郎〉をカメラに納めた。恒秋ではどうしてもピントが甘くなるので、写真撮影はいつも彼女の受持であった。それが終ると、恒秋はまた面を手にとった。
「どうです。階下へ行って、すこし話しませんか」
隆吉が気を利かせて誘ってくれたので、名緒子は日向に会釈をして席を立った。いったん気に入った面と向いあうと、恒秋は際限がなかった。
一階へ降りると、隆吉はさきに立ってロビーの横のカクテル・ラウンジへ入ってゆき、二人は通りに面した広い窓際の卓子に向いあった。
「あなたの前で申訳ないんですが、僕は能とか能面とかは、まるでわかりませんのでね」
と、隆吉は白い歯を覗かせた。
「私もですわ。打つ真似事はしていますけれど……」
「でも、あなたはお父さんの仕事を継がれるんじゃないのですか」
「いいえ。私もそんなつもりはありませんし、父も許しませんわ。お前のは面じゃない、土産物屋の安人形とおなじだなどと、いつも叱られ通しなんですもの」
窓の外はほんものの吹雪になっていた。車は視界が利かなくなって、ライトを点けて這うような緩慢さで走っていた。

「それに、能面打なんて仕事は、よくよく好きで凝りかたまった、父のような者でなければ、とてもつづけてゆかれはしません」

名緒子は吹雪の街なみから視線を返して、唇に微笑を含んだ。

「そうかもしれませんね。割にあわんお仕事のようだから……」

「そうですの。作ること自体が生甲斐でなければ、とても……」

室内装飾や外人観光客の土産用に、デパートの美術品部あたりから持込まれるような仕事を引受けるつもりなら別だが、もともと能面の需要は、いたって少ないうえに、たいていの能面打が十日もあれば仕上げる仕事に、恒秋は三月も四月も、ときには半年あまりもかけなければ気がすまない。そんなにして出来あがっても、彼の場合、納め値はよくて一面十万円前後である。

だから、名緒子が恒秋の反対を押切って、趣味のある素人を集めて面打の技法を教えているのは、そうでもしなければ暮してゆけないからであった。

恒秋もいち時、彼女を自分の後継者にと、真剣に考えていた時期があったらしいが、いまでは諦めている様子であった。

器用な者なら、一年もすれば土産用の面くらいは打てるようになる。それが目当てで集まって来る素人を相手にして、それらしい見てくれだけの技術を教えたりするようになっては、もう本当の能面は打てないと、恒秋は娘への望みを絶ったのであろう。

名緒子のほうは、もともと自分から好きで面をいじりはじめたのではなかった。

子供のころから仕事場で、こまこました手伝いをさせられているうちに、材質の下処理や鑿の使い方、彩色の手順なども自然に覚えた。恒秋が本腰を入れて指導しはじめたのは、彼女が高校へ入ってからであったが、もうそのころには、名緒子は恒秋にとって、かけがえのない助手になっていた。

それ以来、二十七歳の今日まで、恒秋の仕事の世話をやきながら、自分も鑿をとってきたのだから、面を打つことが嫌いなわけではない。しかし、自分がいつの間にか、恒秋にとってなくてはならない存在になってしまったことが、彼女の人生を釘づけにしている感じのほうが深かった。

「あなたはお父様と御一緒にお仕事をしていらっしゃいますの」

「いや。僕は物理屋です」

「物理屋？」

「大学の研究室で、雪氷物理学という、へんなものをやっ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ているんです。好きでなければやれませんし、割に合わない点でも、あなたのお父さんと似たり寄ったりかな」
隆吉は煙草の烟りのなかで、眼を細めて笑った。
名緒子は彼を見つめた。雪氷物理学などというのも初耳で、どんな学問なのかわからなかったが、それよりも、隆吉が地味な研究者だということが、彼女には思いがけなかった。
「どんなことをなさるんですの。雪氷物理って……」
「簡単に云えば、僕の場合は氷を使って、物体の力学的な法則と性格を調べるわけです。はやい話が、石も固体だし氷も固体でしょう。ですが、氷は液体が凍結して固体になったものですから、分解もできれば、さらに硬性を高めることもできる。こういう固体は氷だけで、そこが研究のつけ目でしょうね。やってみると、結構面白いものですよ。氷ってやつは……」
「私なんかにはよくわかりませんけれど、能面を打つのと似たところがあると仰有るの、なんですか、感じだけは領けるような気がしますわ。きっと、隆吉さんは氷がお好きなのね」
「そうも云えるかもしれませんね。ただ、僕の場合は研究の対象としての話ですが、世の中にはおかしな人間もいましてね。研究者でもないし、なんの目的もないのに、ただ、やみくもに氷が好きでたまらないという男もいるんだから、案外、人を虜にするへんな魅力があるのかもしれません」
隆吉は面白そうに云って、珈琲を口に運んだ。
「僕の知っている男に、一人そういうのがいますが、この男などは、それこそ氷に憑かれたとでもいうしかありませんね。並河といって、東京の製紙会社に勤めている、雪や氷とはなんの関係もなさそうな男なんですがね」
名緒子の頬に、ふいに緊張が走った。
「その方、並河なんと仰有いますの」
「五郎です。並河五郎」
隆吉は珈琲茶碗に眼を落していたので、彼女の表情の、束の間の変化に気がつかなかった。
「三年ほど前でしたかな。突然、大学の研究所へやって来て、南極の氷を見せてくれと云いましてね。うちの大学の学術調査隊が、南極から帰って間もなくで、向うの氷を持ってきたのを、新聞かなにかで知ったんですね。零下二十五度の低温室で一時間ちかくも、偏光板にかけた氷の薄片を覗き込んだきり、動かないんです。つきあっている僕のほうが閉口しました」
と、隆吉は低く声に出して笑った。
防寒服を着てはいても、零下二十五度の密室で、一時間ちかくものあいだ、この見学者の旺盛な好奇心が満足するのを待つのは、辛抱のいることだったにちがいない。しか

し、それは隆吉にとって、不愉快な記憶ではないようであった。
「もっとも、ひと口に氷といっても、淡水と海水でもちがいますし、凍結の条件や過程で、結晶は千差万別で、偏光板で見る氷の結晶は、色彩がじつに美しいんですよ。彼でなくても、ちょっとうっとりさせられますね。どうですか、名緒子さんもいち度研究所へいらっしゃいませんか」
「はあ……」
曖昧に頷きはしたものの、名緒子はべつの思いにとらわれていた。
「その方は……並河さんは、やはり氷の研究をなさっていらっしゃいますの」
「それが、ただ氷が好きだというだけなんだから、変っていますよ。ただそれだけのために、暇をみては氷のある場所を歩きまわっているらしいんですね。いまも網走へ行ってます」
「網走へ……」
名緒子は軽く息を呑んで語尾を消した。なにか遠くを見つめるような輝きが、眸の奥に泛んできていた。
「いま、あそこは流氷期ですからね。二三日前の観測では、オホーツク海の沖合三十キロあたりまで結氷しているそうです」
隆吉はそう云って、新しい煙草に火をつけた。
「あそこに、うちの大学の流氷観測所があるんですが、昨日、並河君がひょっこりやって来て、網走へ行くと云うんで、観測所の僕の同僚に紹介状を持たせてやったばかりなんです」
「どのくらい時間がかかるんでしょう。ここからですと……」
「どのくらいって、網走までですか」
名緒子が頷くのを見て、はじめて隆吉の眼に怪訝な表情が泛んだ。
「特急で六時間です。もっとも特急は一本しかありませんが……」
彼は言葉を切って、名緒子を見つめた。
「名緒子さんは、並河君をご存知なのですか」
「存知あげているというほどではありませんけれど……」
名緒子はそっと隆吉の視線をかわして、襟に顎を埋めた。
「その方が帝京製紙の並河さんと仰有るのでしたら、いち度、信州の山でお目にかかったことがあるものですから」
「その並河君ですよ。そうですか……」
と、隆吉は眼をみはるようにした。
「あなたは山もおやりになるんですか」
「私のは山登りのためではないんです。父がおもに木曽や尾州の檜を使うものですから、その地方の山にいい檜があると耳にしますと、ごく稀れにですけれど、見に出かけた

りもいたしますの。並河さんはよく山をお歩きになるそうですわね」
「彼はそれが仕事のようなものでしょう。パルプ用木材の材質調査かなんかを、やっているらしいですからね。氷の話をしてませんでしたか」
「いいえ、なにも。ですから、いまお話を伺っていても、あの並河さんなのかしらって、半信半疑のような気もいたしますの」
「夏のあいだ、日本では自然結氷が見られないでしょう。すると、彼は我慢しきれなくなって、立山連峰の山崎カールあたりへ出かけるんだそうです。あそこは氷食地形といって、大昔の氷河期に、氷河の移動で削りとられて出来た谷なんです。つまり、彼は氷がなくなると、氷の爪跡でも見て、心の渇きを慰めないではいられないらしいのです。世間一般の眼には、なんとも奇妙な男でしょうね、並河君は……」
「変った方ですわ、ほんとに……」
なかば独り言のように、名緒子は呟いた。
霽れていれば、窓から斜め向いに、北海道庁の赤煉瓦の旧庁舎が、構内を覆った積雪と巧まぬ調和をつくって見えているはずであったが、いまは吹雪の白い紗幕に遮切られていた。
ただ、退庁して家路を急ぐ人たちが、頭も肩も胸も雪まみれになって、窓ひとつ隔てた黄昏の深い街路に、黒い帯のように流れはじめていた。
「寝ても醒めても氷のことばかりという点では、僕らも似たようなものですが、物理屋にとっての雪や氷は、とにかく学問につながっています。ところが並河君の氷には、なんの目的もない。自分の心の満足以外には、どんな意味の酬いも結果もないのですからね。純粋といえばまさに純粋だし、莫迦げているといえば、これほど莫迦げたこともないでしょうな」
「ええ。でも……」
なにかをほんとうに好きになるということは、そういうことなのではないか、と云いかけて名緒子は口をつぐんだ。
それは並河五郎と氷の話から、彼女の胸に拡った深い実感であった。感動と云ってもいいなにか名状しがたい心の慄えであった。
名緒子はそっと腕の時計に眼をやった。五時をすこし廻っていた。
「では、またのちほど」
会釈をして彼女は腰を浮かした。
その晩の食事は、ホテルの食堂で日向親子と一緒であった。
日向は恒秋と名緒子を自邸へ招く予定でいたらしかったが、この吹雪では、名緒子はともかく、恒秋をホテルの外

へ連れ出すのは、無理だと思い返した様子であった。
恒秋はその晩のうちに、日向の蒐集を見られないのが、いくらか不満らしかったが、それを察した日向が、
「霽れたら明日にでもおいでください。もっとも、孫次郎のほかは、見ていただけるほどのものもないのですがね」
と、笑いながら慰め顔で云った。
食事がすんで、宛がわれた五階の部屋へ戻ってくると、恒秋は袴を脱いだだけで、すぐ書き物机に置かれた桐箱から〈孫次郎〉をとり出して、喰い入るように見つめはじめた。
名緒子は彼のために写生用具を揃えておいて、京都の家から持ってきた恒秋の常用の玉露を淹れて、書き物机に運んだ。自宅の仕事場での、日常通りの手順であった。
「光線のぐあいが悪いな……。その明りをもっと寄せて」
写生帖を手にとりながら、恒秋はいつもの工房の気難かしい声になっていた。
名緒子は云われた通りに、フロア・スタンドを彼のそばに寄せ、なん度も位置と笠の角度を修正して、恒秋の満足する光線をつくった。
それがすむと、彼女は窓際へ行って、ひっそりと椅子に腰をおろした。それはいまではなかば無意識の習慣になっている、いつでも恒秋の意志に応じて動くための、待機の姿勢であった。
考えてみれば、もの心がつくかつかないころから、私はずっとこの姿勢のままで生きてきたのだと、ふと名緒子は思った。はやくに母を失なったせいもある。妹の佐江子も幼なかった。恒秋にとっては助手、妹には母がわりをするのは、彼女のほかにはなかったせいでもある。けれども、それ以上に、自分の性格的なものに起因しているようにも、名緒子には思われてくる。
名緒子にとって、それは必ずしも堪え難いなりゆきであったわけではない。けれども、二十七歳のいまになってみると、やはり、なにか洞ろな淋しさが心に覗いた。そうして、このごろでは、その空漠とした思いは、彼女が意識する以上に根深いもののように感じられることもあった。
「お父はん、うち、網走へ行って来ようかしら……」
窓に眼をあてたままで、ふいに名緒子は云った。
恒秋は写生帖に筆を走らせていて、応えなかった。仕事に気をとられているときの彼にはよくあることで、耳に入らなかったのかもしれなかった。
「どうせまだ、四五日はここにいやはるのやろ。うち、いち度凍った海いうのを見てみたい」
「網走？　この吹雪にひとりでか」
恒秋はちらりと彼女のほうへ眼をあげたが、またすぐ、画帖に視線を返した。
「せっかくここまで来たのどすさかい、うち、やっぱり見

て来ます。流氷なんて、滅多に見られしまへんもの」
「そんなもん、見てどないするのんや」
「どうもせえしまへん。けど、見とうおすよって……」
見たいから見る。恒秋にそんなふうな云い方をしたのは、初めてのような気が、彼女はした。それだけに、面映ゆくひるむ思いが胸をかすめた。
隆吉の話では、オホーツクの海が三十キロもの沖まで流氷に埋めつくされているという。京育ちの彼女には、そういう風景があることさえ、想像を絶していた。その異様な自然に、心を魅かれているのは確かであった。けれども、もしそこに並河五郎がいると聞かなければ、これほど強く網走の氷の海に、心を誘い寄せられることになったかどうか、怪しいものであった。
なかば無意識に、名緒子の視線は恒秋を逃れて、黒い鏡になった窓硝子に見入った。街の灯をちりばめた夜のなかを、横なぐりの粉雪が走っている。そのうえに彼女自身の顔が、二重映しになって浮かんでいた。
名緒子はその自分の顔に、見るともなく眼をあてたままで、
「朝になっても、こないなお天気やったら行かしまへんけど……」
と呟いた。云いわけじみた気弱な気配が、声のなかに覗いた。
明日の朝になって、まだ天候が恢復していなければ、ほんとうに思いとどまろう。心のなかで、彼女は自分に云い聴かせた。そのかわり霽れていたら、運命が自分の行為を支持しているのだと解釈することにしよう。この吹雪に、ちょっとした賭けをしてみる。そんな気持に、彼女はなっていた。
「まあええ。けど、ひと晩だけやで」
恒秋は〈孫次郎〉を眺んだままで云った。うわの空であった。
その夜、名緒子はいつまでも寝つかれなかった。なん度か、そっとベッドを脱けだして、窓を眺めた。三時すぎになって、まだ街路樹の裸の梢がしなうほどの風が残ってはいたが、雪はやんだ。
ホテルから駅までは、歩いて五分とかからない。名緒子は朝の早い恒秋と一緒に、ゆっくり食事をすました。それから、着物を厚手のセーターと茶革の七分コートに着換えて、フロントへ降りてゆき、網走の宿の手配を頼んでホテルを出た。それでも八時五分の急行の発車まで、二十分ちかくも待たされた。
彼女の胸に軽い狼狽がこみあげてきたのは、列車が走り出してからであった。
思いがけなく、並河が網走に来ていると聴かされて、あとさきの考えもなく汽車に乗ってしまったものの、やは

り、これは思慮に欠けているような気がしてくるのだった。彼女の唐突な訪問を受けて、並河がどんな顔をするだろうと、思っただけで羞恥が胸を噛んだ。

すくなくとも彼にとっては、名緒子が北海道の北の果まで、遙るばる自分を訪ねてくるなどというのは、不自然な出来事にちがいなかった。節度のない、不謹慎な女だと受けとられかねなかった。

げんに彼女自身が、自分の行動に当惑気味であった。名緒子は自分を、どちらかというと、心の芯に冷めたいところがあって、燃えにくい性格だと思っている。

妹の佐江子は、思考がそのまま行為につながってしまうようなところがあって、とき折り、名緒子は自分とひきくらべて眼をみはる思いであった。よく云えば率直で積極的なのだが、その半面、あたり構わぬ身勝手な軽薄さもつきまとっていて、多くの場合、名緒子は眼をみはりながらも、拭いきれない抵抗感がのこるのが例であった。

それがいま、佐江子ならやりそうなことを、ほとんど衝動的に、彼女自身がしているという認識は、名緒子の胸に狼狽のさざなみを立てた。並河の存在が、自分にとってそれほど大きな比重をもっていたという事実も、彼女には思いがけなかった。

名緒子が並河五郎に出会ったのは、前の年の、夏もやが終ろうとするころであった。長野と富山の県境に近い、高瀬渓谷沿いの山峡である。そのあたりから良質の檜材が出るということで、大阪の銘木店の老番頭と一緒であった。

高瀬川は松本のあたりから犀川と名を変え、川中島で千曲川と合流する。高瀬渓谷はこの川の上流の山岳地帯を縫って蛇行する。まわりはすべて、燕岳、有明山、五郎岳、針ノ木峠など三千メートル近い山々に囲繞されて穂高、槍、常念などの日本アルプスの峰々もすぐ背後に迫っている。針ノ木峠を越えれば、眼下は黒四ダムである。

その日は、真夏でも滅多にないような暑い日で、陽が西に傾きかけるころになっても、朝からのあぶら照りが、一向に衰えなかった。

銘木店の番頭も、名緒子も疲れきっていた。そのうえ、名緒子は踝を痛めていた。番頭は商売柄、山歩きは馴れているはずであったし、名緒子も初めてというのではなかったが、元気なようでも、その日の暑熱は、六十近い番頭には酷しすぎた。彼女がそれを庇って歩いているうちに、木の根に足をとられて、足首をひねったのである。

ようやく山峡の細い林道まで降りたところで、軽便鉄道のレールが走っているのを見つけて、二人はその傍らに坐り込んだ。伐木を搬送するためのものらしかった。レールが錆びていないのは、廃休施設でない証拠であった。トロッコでもなんでも、通るのを待って乗せてもらうつもりで



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com